

論 文

国語科教科書におけるアクセントの説明に関する問題点

Some issues on the description of accent in Japanese language textbooks

福盛 貴弘

Takahiro, FUKUMORI

Key words : 音声の働きや仕組み, アクセント, 下がり目

1. 国語科学習指導要領における「音声の働きや仕組み」の扱い

国語科教育では音声について学ぶ機会がほとんどない。その要因の一つとして、学習指導要領において音声の働きや仕組みについてほとんど取り上げられていないことが考えられる。そこで、国語科における学習指導要領における「話すこと」に関わる部分を引用する。

現行学習指導要領・生きる力¹⁾

第2章 各教科 第1節 国語

第2 各学年の目標及び内容

中学校〔第1学年〕

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

(1) 「A話すこと・聞くこと」, 「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。

イ 言葉の特徴やよきまりに関する事項

(ア) 音声の働きや仕組みについて関心をもち、理解を深めること。

音声の働きや仕組みに関する内容は、中学以降では中学1年の学習指導要領でしか取り上げられていない。これを前提とするのであれば、中学2年生以上は音声の働きや仕組みについては周知の事実としていることになるのだが、事実はそうではない。筆者は、これまで音声学について学生に講じてきたが、日本人が自身の母語である日本語の音声を自覚している者は皆無に等しかった。

日本人が音声の働きや仕組みについて学ぶのは、大多数が外国語の授業であるため、外国語の音声については多少の知識があるものの、母語については全く自覚のないまま、「喋れるからそれでいいではないか」という状況で歳を重ねている。結果として、大学で音声学の授業を行う際には、これまでの知識がゼロであることを前提に講じなければならない。これは「教わったが忘れてしまった」ということではなく、「教わっていないから知らない」という状況なのである。

音声の働きや仕組みにおいて、音声学ならびに音韻論の観点から学校教育で扱うべき基本事項を最低限に絞ったとしても、該当項目は分節音における母音と子音、超分節音におけるアクセントとイントネーションおよび音節と拍²⁾となる。本稿では、国語科教科書において、アクセントに関する説明がどのようになされているかについて確認し、それが音声学ならびに音韻論の観点から見直すと問題が多いということに関して指摘していくことにする。

2. 『伝え合う言葉 中学国語1』におけるアクセントの説明

本節では、教育出版から刊行された『伝え合う言葉 中学国語1』(平成24年版³⁾)によるアクセントの説明を確認していく⁴⁾。この教科書では、pp.198-201において「日本語の音声」が取り上げられている。言い換えれば、中学高校の国語の教科書では、この4ページ分しか扱われていないのである。その中でアクセントについては、pp.200-201に記されている。まずは、その全文を引

用し、内容を吟味したい。

「アクセント」

「このはし(橋)渡るべからず(渡ってはいけません)。」と書かれていた橋を、「はし(端)ではなく、まん中を歩けばいい。」と言って、どうどうと橋のまん中を渡った、という有名なとんち話があります。

「はし(橋)」と「はし(端)」は、声に出して言っても区別がつかみませんが、あとに「が」をつけて言ってみると違いがわかります。

シ	ガ	シ
○	○	○
ハ		ガ
○	○	○
(端が)		(橋が)

このように、「端が」は「シ」と「ガ」を高く発音し、「橋が」は、「シ」だけを高く発音するのが普通です。

また、「橋」とご飯を食べる「はし(箸)」は、「ハ」と「シ」のどちらの音を高く言うかで、区別できます。

ハ	シ
○	○
シ	ハ
○	○

このように、同じ音をもっているても、言葉によって、音の高低が決まっていることがわかります。これをアクセントといいます。方言によって、同じ言葉でもアクセントが異なったりしますが、言葉に対して決まったアクセントのない方言もあります。

ここで記された高低の音調は、東京方言を基にした共通語によるものである。そこで問題になるのは、共通語のアクセントはそれぞれの拍⁵⁾に高低の音調が付与されているわけではないということである。アクセントという学術用語は世界中の言語を対象にした用語であり、アクセントは単語に対する強さや高さの決まりごとであると定義されている。よって、ロシア語やドイツ語や英語のように強さによる決まりごとがある強さアクセントの言語もあれば、日本語やトルコ語や朝鮮語のように高さによる決まりごとがある高さアクセントの言語もある。

強さアクセントの言語を外国語で履修している生徒に対しては、まずこの違いを説明しなければならない。しかし、教科書において紙幅の都合でそういった説明ができなかったことに対しては、授業で教師が説明すれば事足りると思われる。

では、単語に対する高さの決まりごとがある共通語のアクセントは、どのような仕組みであるのか。この点については、他の教科書を概観したうえで後述することにする。

3. 小学校国語科におけるアクセントの説明

3.1. 小学1年および2年におけるアクセントの扱い

アクセントについては、いきなり中学校で扱われるわけではなく、小学校の段階で何らかの説明がなされている。1節について、小学校国語科の学習指導要領を引用して確認する。

現行学習指導要領・生きる力

第2章 各教科 第1節 国語

第2 各学年の目標及び内容

〔第1学年及び第2学年〕

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

(1) 「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。

イ 言葉の特徴やきまりに関する事項

(イ) 音節と文字との関係や、アクセントによる語の意味の違いなどに気付くこと。

「アクセントによる語の意味の違い」というのは、アクセントによる弁別機能と呼ばれるものである。2節の例で確認すれば、「箸が」は「高低低」、「橋が」は「低高低」、「端が」は「低高高」というように音調の違いで語の意味の違いがある。この点について、小学校低学年の段階で気付かせることについては、アクセントを理解する第一歩としては適切かと考える。この内容を扱った国語教科書として、光村図書から刊行された『こくご2上』(平成23年版)のp.43に記された「音の高さ」を引用する。

音の高さ

「雨(あめ)」と いう ことばを、こえに 出して 言って みましょう。

「あ」を 高く 言いましたか。「め」を 高く 言

いましたか。どちらも 同じ 高さでしたか。
たべる「あめ」は、 どうでしょう。「雨」と 同じ
じですか。

ひらがなで 書くと 同じ ことばでも、 音の
高さで くべつできる ことが あります。

小学2年の段階で、アクセントという用語を使わず音の高さとした点については、分かりやすく説明するという観点に加え、アクセントは拍に対する高低音調の付与ではない、すなわち「高さの違い=アクセント」ではないためアクセントという用語を使わずに見出しを立てているという点からみても適切である。

ただし、注意すべき点はある。アクセントは方言によって異なるものである。先にあげた「箸」「橋」「端」では、大阪方言では「箸」は「低高」,「箸が」は「低低高」,「橋」は「高低」,「橋が」は「高低低」,「端」は「高高」,「端が」は「高高高」であり、共通語とは異なるアクセント体系である。「雨」は「低高」,「飴」は「高高」であり、やはり異なる。また、宮崎県都城方言のように1型アクセントの方言⁶⁾では、2拍語なら「低高」,3拍語なら「低低高」であって、大多数の語彙において型の対立がない。

この教科書の説明の優れている点は、こういった方言アクセントに対して対処されていることである。共通語の音調を示すのではなく、自身の言葉ではどうなのかを確認させようとしているところが、言葉の音調を気付かせる初期段階としては適切だと考えられる。

現代ではテレビやインターネットの普及によって、早い時期から方言と共通語の使い分けができる生徒がいると思うが、全ての生徒がそういうわけではない⁷⁾。従って、その地域によって方言アクセントと共通語アクセントの違いを気付かせる必要がある。この気付かせについては、小学5年および6年において行われることになっている。

3.2. 小学5年および6年におけるアクセントの扱い

これまでと同様に、小学校国語科の学習指導要領を引用して確認する。

〔第5学年及び第6学年〕

2 内容

A 話すこと・聞くこと

- (1) 話すこと・聞くこと的能力を育てるため、次の事項について指導する。

ウ 共通語と方言との違いを理解し、また、必要に応じて共通語で話すこと。

「共通語と方言との違い」といえば、方言による語形の違いや、「来ない」が大阪方言では「けーへん」「こーへん」になるといった例が浮かびがちだが、先に述べたようにアクセントは方言によって異なる。この点を説明している教科書として、教育出版から刊行された『ひろがることば しょうがくこくご5』（平成23年版）をあげ、pp.16-17に記された「方言と共通語」を引用する。

「方言と共通語」

ところで、方言と共通語のちがいは、言葉だけなの
でしょうか。

次の文の **＝** 線の言葉の発音に注意して読んでみましょう。

かき, 大安売り。

果物の「かき」か、貝の「かき」かを区別できましたか。共通語では、「か」を高く発音すると貝の「かき」になり、「き」を高く発音すると果物の「かき」になります。

このように、言葉のどこを高く発音し、どこを低く発音するかというきまりをアクセントといいます。

日本語のアクセントは、全国共通ではありません。

「秋」という言葉を例にとってみましょう。東京や名古屋、広島では「あ」を高く発音し、京都や高知では「き」を高く発音します。共通語のアクセントは東京のアクセントに近いので、共通語のアクセントでは「秋」は「あ」を高く発音します。

みなさんの住んでいる所ではどのように発音しているか、確かめてみましょう。

この説明は小学2年より一歩ふみだした形になっているが、アクセントという用語を使いつつ高低音調の付与でしか説明していないところに問題がある。東京型アクセントに属する名古屋や広島と京阪型アクセントに属する京都や高知とでは、アクセントの仕組みが異なるからである。それは、高くなる位置がずれている、あるいは高くなるところが逆になっているという類のものではない。教師は教える際に、アクセントの仕組みを分かった上で、今の段階ではこの説明にとどめておくというのであればまだましなのだが、分かっていないとなれば話に

ならない。また、小学校の段階では、他の都道府県のアクセントをふまえた音調を耳にする機会が少ないため、教師がある程度方言アクセントに対する知識を持っていないといけない。教科書の紙幅の都合を、現場で解消するためには教師が十分な知識を持っているかどうか問われることになる。

4. 日本語共通語のアクセントとは

4.1. アクセントの仕組み — 音韻論的アクセント

音韻論では、日本語共通語のアクセントは以下のように規定される(福盛貴弘2010b)。

- (1) 下がり目⁸⁾があるかないか。
- (2) 下がり目があるとすればどこにあるか。

例えば、「箸」「橋」「端」のアクセントは以下のように考える。「箸」は1拍目から2拍目にかけて下降する。よって、1拍目の後ろに「下がり目」が指定される。「橋」は「が」が後続する「橋が」では、2拍目から3拍目にかけて下降する。よって、2拍目の後ろに「下がり目」が指定される。「端」は「端が」となっても下降しない。よって、「下がり目」を指定しないので、単語や文節の中では下降しない。以上をふまえて、拍の数だけ下がり目が指定でき、加えて下がり目が指定されない語があるので、アクセント型の数は $n+1$ (n =拍の数)と規定される。

アクセントの捉え方には、段階観と動態観の2種に分かれる。前者は拍に対して高低の音調が付与するという考え方であり、後者は上昇や下降という変化によって規定する考え方である。日本語共通語においては、動態観でとらえる方が適切である。この点については以下の例で説明する。例えば、高低2段階で音調を示すと、「橋が」の音調は低高低となり、「この橋が」の音調は低高高低となる。これは、「端」という単語の1拍目に低という音調が指定されているのではなく、句頭において1拍目から2拍目に対して上昇し、その後は高平の音調が続く句音調というイントネーションが関わっている。音声の実現形には、音声の種々の要因が関わっている。「橋が」については、2拍目の「シ」の後ろにある下がり目と句音調を足し算することで、低高高低という音調が実現している。アクセントとは単語に指定されるものであり、単語単独での「橋」における「ハ」の低という音調は、前接の語によって句頭とならない時には指定されない音調である。一方で、「シ」の後ろの下がり目

は変わらない。

また、「この箸が」の音調は低高高低低のように2段階でも記すことができるが、「長い箸が」では「長い」の「ガ」の後ろと、「箸が」の「ハ」の後ろに下がり目(∟)があるため、2段階では表記できなくなる。

コ ノ ハ∟ シ ガ (箸)

○ ○

○ ○ ○

ナ ガ∟ イ ハ∟ シ ガ (箸)

○

○ ○ ○

○ ○

以上の例から、アクセントとして指定されているのは下降動態に対する下がり目のみであって、高低の音調が付与されているわけではないということが明らかである⁹⁾。今回調べた教科書の記述では、ここで述べた音韻論的アクセントについては全く説明されておらず、アクセントの仕組みを理解するには困難を極めることが予想できる。

4.2. アクセントの働き

3.1節で示したように、光村図書『こくご2上』では、アクセントの弁別機能を気付かせるための記述が示されていた。アクセントの違いが意味の違いに関わるというものである。

先述したように、今の生徒はテレビやインターネットの影響で、純粋方言話者ではなく共通語とスイッチができる2言語話者が大多数である。よって、「雨」と「鉛」のそれぞれの音調がどうであるかとは別に、音調の区別があることは内省によって自覚しやすいと思われる。しかし、アクセントの弁別機能というのは、多くの語彙に適用できるものではない。例えば、教育出版『ひろがることば しょうがくこくご5』において、「柿」と「牡蠣」のアクセントの違いについて述べられているが、共通語では「牡蠣」「夏期」「夏季」「火気」「火器」「花期」「下記」は全て1拍目の後ろに下がり目がある型で、弁別機能は働かない(福盛貴弘2010b)。「箸・橋・端」のように、同音異義語でアクセント型がすべて異なるという例を探す方がむしろ困難であり、アクセントの最も重要な機能として弁別機能があるという点には疑問が生じる。しかし、弁別機能を学ばせないわけにもいか

ず、音韻という抽象的なものよりは表面的な意味の方が、初学者には分かりやすい。よって、教員は同音異義語で区別する例とともに区別しない例もあるということをつまえて説明するのであれば、初学者に気づかせるための成果は期待できよう。

ただし、若干の懸念がある。それは、アクセントの働き¹⁰⁾に関する説明が中学1年次以降全く説明される機会がないという点である。結果として、アクセントとイントネーションの区別がついていない人はかなりの数であることが推測できる。文法項目が小中高と連続的に続いていくのに対し、音声に関することは早々に打ち切られるというところに、国語科教育における音声教育軽視の一面が垣間見られる。現状でこれを補う術は、高等教育で「音声学」の授業を受講するしかない。

4.3. 音声学的アクセント

アクセントの仕組みを教えるうえで、先に説明した音韻論的アクセントを理解していることは大前提となる。しかし、教育現場でいきなり抽象的な仕組みを教えても、生徒がすぐに理解できるとは思えない。よって、音調の違いを気付かせることを導入として用いることについては全面的に否定するものではない。動態観が日本語共通語のアクセントを捉えるには適切だが、そこにたどりつくための過程として段階観を適用するのなら、それは有用であると考えからである。ただし、その際に高低の2段階でこと足りるかどうか問題となってくる。そこで、城生佰太郎(2008)で述べられている音声学的アクセントの適用を検討していく。

例えば、「蝙蝠」という語の基本周波数曲線を析出すると、1拍目の初頭に軽い上昇があった後に高さの頂点に達してから語末にかけて漸次的に自然下降していくさまが目視できる。この点をふまえて、以下のような説明がなされている。

現象としての「蝙蝠」は、(中略)絶えずピッチ変動を遂げている。従って、このような連続体(ピッチ下降動態)を少しでも現象に近づけて表記しようとするれば、音声学的レベルからIPAなどの表記を用いる以外に方法はない。結果は、次のようになる。

[|ko:|mo|ri|]

わが国では、辞典類のほとんどが音韻論的レベルからアクセントを表記しているので、「蝙蝠」は、

コ

ーモリ

のように、[高低低低]として扱われている。このような表記法は、日本語の母語話者同士間であれば簡便である。しかし、日本語を知らない外国人や、異なる方言圏で言語形成期を過ごした人が新たにアクセントを学ぼうとする際に拠り所とするには、不完全な情報しか記載されていないということになり、国際性に欠ける。

音声学が採用される領域は多岐にわたっているが、隣接科学となる言語学に対しては記述言語学で用いられるのが基本である。未知の言語、無文字の言語を扱う際には、まず研究者が耳で音声を聞き取り、IPA(国際音声記号)で記述するところから始まる。これは、たとえ文字表記がある言語でも実際には文字通りに発音しているわけではなく、まして方言であれば表記法が確立していないという点で、日本語にも十分当てはまる方法論である。また、超分節音については文字で表記されないことが大多数である。よって、経験によって発している音声を自覚したうえで理解するためには、ある時期に一度この訓練をしておいた方がよいと考えられる¹¹⁾。そこで、城生佰太郎(2008)で提唱されているのは、以下の方針である。

- (A) 高さの段階(reister)を高(High=H)・中(Middle=M)・低(Low=L)とする。
- (B) 音調の方向性を平坦・上昇・下降とする。
- (C) 音声学的音節に対して付与する。短音節はCV(子音+母音)、長音節はCVV(長母音)、CVQ(促音)、CVN(撥音)とする。

高低による2段階ではなく、高中低による3段階観を用いることによって、先述した「蝙蝠」は「コー」「モ」「リ」の音節に分け、「コー」は高から中への下降、「モ」は中、「リ」は低という音調が付与されている。

3段階観で音声学的アクセントを捉えた場合、「橋が」と「端が」には以下のような違いが生じる。

ハ シ] ガ (橋) ハ シ ガ (端)
 ○
 ○ ○ ○
 ○ ○

共通語では、「橋が」は中高低、「端が」は低中中と捉えることができる。また、人によっては、単語単独での「橋」と「端」において、「橋」は低高、「端」は低中と区別する。よって、音調に対して敏感である者にとっては、3段観で捉える方が、2段観で付与される音調に違和感を覚えるという不満が解消される。

なお、この捉え方には、上野善道（1975）の指摘も把握しておく必要がある。

「鼻」と「花」とは単独では区別がないと主張されることが多かったが、もし単独でも区別があると主張する人の考えは間違っていると言うとすれば、それは行き過ぎである。東京人の中には、無核アクセント素とアクセント単位の末位に核のあるアクセント素（と結果的に解釈されるもの）を、(a)常に区別なく発音する人、(b)対のある単語に関しては例えば「下中¹²⁾」と「下上」で区別するが、対のない単語に関してはその区別が一貫しなかったり無かったりする人、(c)上記に近いが、対のうちでもよく引かれる著名なもののみを区別する人、(d)両者を常に区別して言う人、があってもおかしくないと思う。

アクセントについては、方言差だけでなく個人差もふまえたうえで柔軟な捉え方をしなければならない。教育現場で『NHKアクセント辞典』にみられるような規範¹³⁾のみを教えるのは、現実の日本語にあわない例が出てくるため不相当である。特に教師の世代と生徒の世代でのアクセントの世代差による違い¹⁴⁾は、方言だけではなく共通語であっても多くの語彙で生じている¹⁵⁾。よって、教師自身のアクセントを規範として教えることは、現実を捉えていない場合があることも知っておく必要がある。

また、音節数が増加すれば(d)のタイプの人が減り、区別がはっきりしない（早田輝洋1977）ことも知られている。例えば3音節においては、「訛り」と「鉛」や「五角」と「互角」のような例では、「訛りが」「五角に」では中高高低、「鉛が」「互角に」では低中中中のような者がいる。しかし、単独では「訛り」と「鉛」、「五角」と「互角」で、前者が中高高、後者が低中中（ある

いは低高高）という区別がなくなり、ともに低中中（あるいは低高高や中高高）で一貫するといった実現形で発音する可能性があるということである。また、「五角」は「五画（高中低あるいは高低低）」と同じアクセントになっていることもある¹⁶⁾。その場合は、それはそれで生徒自身のアクセントとして受け入れるべきである。こういった実態をふまえながら第一段階として生徒自身のアクセントに気付かせるためには、教育現場で種々の方略をとりながら個人個人の発音の違いに注意を払う点が必要となってくる¹⁷⁾。

5. 結語

本稿では、音声学的アクセントおよび音韻論的アクセントの観点から、現状の国語科教科書におけるアクセントの記述の問題点を指摘し、教育現場で生徒にアクセントを気付かせるにはどうすればいいのかということを示してきた。

これまでに示してきたことをふまえて、国語科教員がアクセントに関する働きと仕組みを理解していれば、「普段話せているんだから、それでかまわないじゃないか」「このアクセントが正しく、これ以外は間違っている」「変な発音をするんじゃない」「音声項目は国語の授業では必要ない」などの発言にはつながらないはずである。こういった偏見をもとにした指導が、現実の日本語に対する理解を妨げる可能性があるということは言うまでもない。今後4年ごとに改訂される国語科教科書において、さらなる改善がなされることを期待したい。

また、英語科教育が初等教育で行われることは、その善し悪しは抜きにして今後推進されるだろう。その際に、外国語の発音の仕組みは知っているものの日本語の発音の仕組みは知らないということでは、母語話者として話にならない。外国語を鏡として日本語を学ぶというのも一つの方略ではあるが、一方で日本語音声の基礎を国語の授業で教えなければ、音声項目に関して両科目はリンクされず、理解の促進を遅らせることになる。外国語を使えない以前に母語を知らない方が、国際化の波に抗っているのである。

日本語については、初等および中等教育では国語の授業で学ぶしかない。「読み書き」に偏重し、音声教育を軽視している国語科教育の現状に対して、一考を促すべく本稿を記した次第である。

<付記>

本稿は、本学外国語学部日本語学科で開講している

「音声学」の講義内容に基づくものである。

【注】

- 1) http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/koku.htm
- 2) 国語科教科書における「音節」は「モーラ」「拍」であり、「音声学的音節」でも「音韻論的音節」でもない。用語の混乱を避けるために、本稿では国語科教科書で用いられている音節という用語を使わない。
- 3) 使用開始年度を示す。以下同様。
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/gaiyou/04060901/_icsFiles/afieldfile/2015/06/15/1235087_01.pdf
- 4) なお、この教科書を選んだ理由は、この教科書がダメだからというわけではなく、むしろ同時期に改訂された中学校1年生の国語科教科書の中で、音声に関する内容に対して最も真摯に取り組んでいると感じた教科書だからである。そのうえで、それでも問題点があることを本稿において指摘している。本稿で取り上げた教科書については、全て同様の理由である。なお、現行の改訂版の精査については、今後の課題とする。
- 5) 国語科における「音節」という用語の使い方にも問題があるが、この詳細については別稿で論じることにする。ここでは、簡潔に例示しておく。国語科では「ニッポン」の音節を「ニ・ッ・ポ・ン」と区切るようになっていく。しかし、これは誤りである。「ニ・ッ・ポ・ン」と区切るのは拍あるいはモーラを基準とする場合であって、音節を基準とすれば「ニッ・ポン」のように2つに区切るものである。音節という用語もアクセントと同様に世界中の言語を対象にした用語であり、独自の定義を用いることによって、「ニッ・ポン」のような例が説明できなくなることに對する危惧がある。定義については、福盛貴弘(2001, 2010b)を参照のこと。
- 6) 音節数や拍数に関わらず、都城方言では音調の型の数は1つである。また、鹿児島方言や長崎方言では2つである。そういった現象に対し、上野善道による「N型アクセント」と早田輝洋による「語声調」という考え方の違いがある(早田輝洋1999)。この問題については、教師が勉強しておくべき内容ではあると考えるが、初等～中等教育で適用できる内容ではないと考えるため、その詳細は略述する。
- 7) いわゆる無アクセントあるいは崩壊アクセントと呼ばれるアクセント型を有する地域となる南東北方言(宮城南部、山形南部、福島)や東関東方言(茨城、栃木)を母

国語科教科書におけるアクセントの説明に関する問題点

- 方言とする者にとっては、高低差が聞き取れない可能性がある。
- 8) 下降に対する用語としては、服部四郎による「アクセント核」における「高低核」、上野善道による「下げ核」、金田一春彦による「アクセントの滝」、平山輝男による「下がり目」、早田輝洋による「アクセント」などがある(上野善道2011)。それぞれの考え方に違いはあるが、学校の現場では下降の事実をふまえていけば支障はないと考える。なお、筆者が「下がり目」を使っているのは、「アクセント核」という用語に問題がある(福盛貴弘2014)点と、物理量と認知量の対応は、例えば「基本周波数」に対する「高さ」、「持続時間長」に対する「長さ」というように物理量を漢語、認知量を和語で示す方が他の用語と整合性がとれるという2点に起因する。
 - 9) 京阪方言のアクセントについても、動態観でとらえる方が適切である。京阪方言では共通語における(1)(2)に加え、句音調ではなく、高く始まり高平が続く式音調(高起式)と低く始まり語末のみ高くなる式音調(低起式)がアクセントとして関わってくる。例えば、「桜」と「雀」は共に下がり目がない。「桜」は高起式なので、音声の実現形は単語全体が高高高となる。一方の「雀」は低起式なので、音声の実現形は語末のみ高くなる音調が付与されるため、低低高となる。なお、この両者は共通語アクセントにはないアクセント型である(福盛貴弘2010b)。
 - 10) なお、アクセントには他に統合機能、すなわちアクセントによって語や句をまとめるという機能がある。これについては、語・句の構造や語形成についての知識が必要となってくる。よって、中学・高校で扱えるかについては、文法項目との関連が必要である。統合機能は全てのアクセントにある最も重要な機能であるが、現状では文法項目との関連が上手くとれないようであれば、高等教育で扱うのが適切であろう。
 - 11) ただし、IPAでの記述法を習得しろとまでは言わない。それは高等教育で「音声学」を学んでからできればいいレベルである。初等・中等教育では、まずは耳による経験値を上げてから、その後に理屈を少しちらつかせるぐらいがちょうどよい。なお、理屈を学ぶことによって経験値が上がるケースもあることも付言しておく。
 - 12) 3段観を高中低ではなく上中下で捉えた時の言い方である。
 - 14) 『NHKアクセント辞典』は、放送用語としての規範ではあるが、日常用語としての規範ではないことに注意を払ったうえで使わなければならない。
 - 15) 教員間でも世代差の違いがあるため、注意を払う必要が

ある。

- 16) 例えば、京阪方言では、「船が」が低低高（フネガ）>低高低（フネガ）のように低起式は変わらず下がり目の位置が変わる例や「詐欺師」が高高低（サギシ）>低高低（サギシ）のように下がり目の位置は変わらないが高起式から低起式に変わる例などがある。共通語では「苺」に低高高（イチゴ）、高低低（イチゴ）、低高低（イチゴ）といったゆれがある例や「孫悟空」では『西遊記』なら低高高低低（ソングク）、『ドラゴンボール』なら高低低高低（ソングク）と区別していたが、2つの型が融合して低高高低低（ソングク）が生じたという例（福盛貴弘2010a）などがある。こういった例は枚挙にいとまがない。
- 17) 「五角」は「ゴカク」と「ゴカク」というゆれがある。福盛貴弘（2012）では、共通語において「西瓜（低高高）」と「SUICA（高低低）」の区別ははっきりしているが、「酢イカ」ではアクセント型が真つ二つに分かれる例を示している。語彙によっては、方言差ではない個人差でアクセント型が分かれることがあるという例示である。
- 17) 3段観の問題点については、川上夔（1995）、福盛貴弘（2010b）も参照のこと。

【参考文献】

- 上野善道（1975）「アクセント素の弁別的特徴」『言語の科学』6：23-84.
- 上野善道（2011）「アクセント核」城生佰太郎・福盛貴弘・斎藤純男編『音声学基本事典』329-331. 勉誠出版
- 川上夔（1995）『日本語アクセント論集』汲古書院
- 城生佰太郎（2008）『一般音声学講義』勉誠出版
- 早田輝洋（1977）「生成アクセント論」『岩波講座日本語5音韻』323-360. 岩波書店
- 早田輝洋（1999）『音調のタイポロジー』大修館書店
- 福盛貴弘（2001）「モーラと実験音声学」城生佰太郎編『コンピュータ音声学』日本語教育学シリーズ3：151-205. おうふう
- 福盛貴弘（2010a）「孫悟空のアクセントに関するまとめ」『外国語学会誌』39：339-344. 大東文化大学外国語学会
- 福盛貴弘（2010b）『基礎からの日本語音声学』東京堂出版
- 福盛貴弘（2012）「「スイカ」のアクセントのゆれについて」『外国語学会誌』41：137-147. 大東文化大学外国語学会
- 福盛貴弘（2014）「アクセント観小考—アクセント核という用語を使わない理由—」『外国語学研究』15：157-162. 大東文化大学外国語学研究科